

人権つうしん

2006年 春号

みんなで人権について考えてみませんか?・・・



平成18年(2006年)3月27日発行
通算32号

発行 長野県ユマニテ・人間尊重課
長野県教育委員会文化財・生涯学習課

発行人 両角 奎吾

長野市大字南長野字幅下692-2

電話 026-235-7437

FAX 026-235-7493

Eメール bunshou@pref.nagano.jp

車椅子介助をした 三人の 子どもたち



ある日の下校時、三人の男の子たちが、学校の近くに住む車椅子に乗った高齢者を見かけました。普段は、介助をするパートナーがいますが、今日は見あたりません。一人で車椅子を操作しているのです。

ある所までくると、車椅子は前進できなくなっていました。三センチメートルほどの段差があるのです。

その方は何回も勢いをつけて、乗り越えようとしていました。

そのことに気付いた三人は、そっと車椅子に手をかけ力を入れました。

「なかなか動かなかった車椅子がスツと軽くなったので、びっくりして振り返りました。」

「やあ、みんなありがとう。もうちょっと押して行ってもいい?」

「助かるねえ。」

しばらく行くと、国道に出ました。

「実は、向こう側に渡りたいんだ。」

と、三人に伝えました。すると、子どもたちは困ったような顔をしながらも、少し離れたところで、何やら相談を始めました。

『国道を横断する時は、歩道橋を渡らなければいけない』という学校のきまりがあるので。

「なあ、どうする?」

「困ったなあ。」

「どうしよう。」

腕を組んだり、「こちらをちらつと見やつたりしながら、相談が続きました。

そして、ようやく

「ぼくたちやってみます。」

と元気な声が返ってきました。

三人は躊躇しながらも、横断歩道をわたって、反対側に向かいました。一人が高く手を挙げ、二人が車椅子を押し・・・。

次の日、校長先生のところには、昨日の車椅子の高齢者から、

「本当に、私は有り難かった。今時、こんな子どもたちがいるんですね。素晴らしい子どもたちですね・・・。」と御礼の電話が入りました。

また、学校では、この三人の行動が話題になっていました。

歩道橋を通らずに、車椅子を押して国道を渡ったことが、すでに伝わっていたのです。

皆さんはこの出来事について、どう思いますか。





じんけんメッセージ



気配りも一流 ~ 浅利純子さんから学んだこと ~

去る11月7日に行われた第20回記念松川町駅伝大会の時のことです。

招待選手の浅利純子さんは、閉会式のために中央小学校の体育館へ集まって来た66チームの選手たちが脱いだ靴が雑然としているのを見て、一組ずつそろえてくれました。

さらに、町長さんと私が行くと、スリッパをそろえて出してくれました。している事が逆ではないかと、恐縮しました。

また、閉会式後に聞いたのですが、浅利純子チームのアンカーとして28位でゴールした浅利さんは、そのまま、また第5中継所へ戻り、最終チームのアンカーを励ます伴走をして、第6区をもう一度走ったというのです。

浅利純子さんは、現在ダイハツのマラソンチームのコーチですが、現役の時は、93年の大阪国際女子マラソンで優勝し、同年8月の世界陸上の女子マラソンで日本陸上史上初の金メダルに輝きました。さらに、95年の東京国際女子マラソンで優勝してアトランタオリンピックに出場したのですが、靴が合わなくて血だらけの足で17位。

しかしその挫折を乗り越えて98年の東京国際女子マラソンで再び優勝して世界陸上に出場しています。

つまり、世界的な一流選手なのです。現役を引退しているとは言え、マラソン界の一流選手が、「しゃべるのは苦手です」と言葉少なでしたが、靴をそろえたり、スリッパを出したり、最終ランナーの伴走をしたりという気配りと謙虚さには、感動し敬服しました。

「勝って驕らず」とか「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉通りの行為なのです。

ちやほやされるとつい、いい気になってしまいがちですが、浅利純子さんは、人としての謙虚さと気配りを身をもって教えてくれました。

浅利純子さんの行為は、大会当日の秋晴れのようにさわやかでした。



松川町公民館長 横田隆司 公民館報「まつかわ」より



Let's Try ~ ジェンダー川柳 ~



次の川柳の に合う言葉を、下の欄から選んで川柳を完成させてみましょう。

喜ぶくせにと 息子に言われ

「お母さん？」 親じゃない

都合よく 使い分け

充電中 職業欄に と書き

覚えられない 私の名前

頭に刻んだ ゴミ出す日

5月5日は休みでも は 皆仕事

肩書は となる老後

ベビー服の 考える

子守りすりゃ 男と 決めつける

嫁の上 つくのは 3時間

赤と黒 ランドセル

- ・男女で決まる
- ・レディースデー
- ・3月3日
- ・花が
- ・定年後
- ・女らしさを
- ・色でほめ方
- ・私はあなたの
- ・主夫
- ・お嫁さん
- ・リストラ
- ・家事手伝い



出典；パルティーとちぎ女性センター編（改作） 島根県教育委員会人権教育事例集 社会教育編（転載）

~ ジェンダーの視点から身の回りを見る ~

- ・ 地域や家庭での行事や酒席では、女性は裏方（台所）を引き受けるのが当たり前だ
- ・ 自治会などの団体の代表者は、男性になった方がよい
- ・ しきたりや慣習は、自分が嫌だ、時代に合わないと思っても守るべきである
- ・ 女性は文科系、男性は理数系の学問や職業が向いている
- ・ 子どもは、女の子は女らしく、男の子は男らしく育てた方がよい
- ・ 子育てや介護は女性が分担するのが当たり前である
- ・ 女性は家庭のことをきちんとしてから仕事に出るべきだ

皆さんは
どのように
お考えにな
りますか？

人間は生まれつきの生物学的性別（セックス/sex）があります。一方、社会通念や観衆の中には、社会によって作り上げられた「男性像」、「女性像」があり、このような男性、女性の別を「社会的性別/」（ジェンダー/gender）といいます。「社会的性別」は、それ自体に良い、悪いの価値を含むものではなく、国際的にも使われています。

語り合い、気づこう人権

「自らを 明るく 前向きに

語ることから 何かが変わる」



「町の人権を語る会でさわやかに語ってくれたAさん」

定年退職後、妻と二人で農家人としてわずかな田畑の仕事に明け暮れる日々が始まりました。

長年、私を支えていたものは、「オレが働いて家族を支えている。」「オレが家族を食わしている。」そんな思いでした。

職場から家に入り、そこに居る妻の姿が初めて目に留まりました。妻はこの年になるまでただけ孤独な日々を送ってきたのか？それには気付かず、オレがオレが…で生きてきた自分があったのです。

「買い物に連れて行って」と言われれば「バスがある」と言い、「大きい買い物があるので、車で連れて行って」と言われれば駐車場まで待っていた自分。待つ身には時間が長く、重い荷物を抱えて戻る妻に対して、私は決していい顔はしませんでした。

しかし私は、人権を語り合うことによつて初めて妻の立場に心を寄せることができるようになりました。今、自分がこの妻のためにできること、それは何かと考え、恩着せがましい生き方をやめ、買い物と一緒にできる自分になったのです。

「自身の姿をつぶさに見つめるBさん」

私は体育の教師です。学校でも家でもどちらかという相手を見下したような態度で生きてきました。自分にとっては当たり前だったのです。

家では、今日までドカッと座り込み、ビールを飲み、食事を済ませていました。洗濯されたものを当たり前に着て掃除された家で、「オレのおかげで家族は…」と

思って生きてきました。そんな私が、今年から職場で「人権を大切にしよう」と人にいう立場になりました。そのことで、自分自身

がどのように生きているのかがちよつと見えるようになりまし。家に居る自分の姿は、学校に居る時の自分の姿に通じていました。そこでまず、家に居るときの自分の姿を変えてみようと思いました。

「洗濯物、たたむことができる」「食器だつて洗うことができる」等々。今まで、やらないことが当たり前だった家事のいろいろが自分にもできるじゃないか。

共にできることをやる。この行動をしばらく続けていたら、不思議なのですが、家族に「ありがとう」の心が芽生えてきました。家族もちよつと変わってきたような気がします。

今度は「学校でどのように変わることができのかが私のこれからの課題です。」

「町づくりの観点から人権を考えるCさん」

「人権」について同じ地域の人たちと語り合いました。今まで考えたこともないことです。私はこれまで何気なく住んできた町について考えてみました。

車で移動することが多い私ですが、冬のこの時期、歩道の除雪がどうなっているのか注意して見ました。

すると、屋根から落ちた雪や除雪によつて積上げられている雪で、とても歩きにくい状態であることに気がきました。

誰にでも優しい町づくりって一口に言うけれど、あえて焦点を「人権」に合わせてみなければ見えないなあ。交通標識もカーブミラーも…。

できるだけ多くのことが見える自分になりたいです。こうした場で皆さんと一緒に考えていきたいと思ひます。

